

2004年度夏学期中国思想文化史概説

「初期道教思想の形成」 期末レポート

40085 太刀岡勇気

## 課題 1

道教一派である上清派は南嶽魏夫人に始まる。南嶽魏夫人とは西晋代任城にいた魏華存という女性の道教信徒がなった真人である。魏華存は、幼い頃から道を好み真仙を志慕し、冷静恬淡な性格で老莊の經典を読み、四季を通じて呼吸法の修練に努め、長生薬を服用し、道教の煉養の境地に完全に到達した。二十四歳の時に嫁がされ劉璞・劉瑕の二人の子を産んだが、その自立後には別室に一人でこもり修行に専念した。身を浄めること百日にして大極真人の安度明、東華大神の方諸青童、扶桑碧河湯谷神の王景林、真人小有仙王・清虚真人の王褒が、扶桑太帝君の命により神真の道を伝えるため降下した。魏夫人は王褒から「太上宝文、八素隱書、大洞真經、靈書八道、紫度炎光、石精金馬、神真虎文、高仙羽玄等の経凡そ三十一卷」、王景林から「黄庭内景經」を授かった。これ以後真人たちがしばしば訪れたが、無欲恬淡であった王褒に弟子入りし、道教修煉の最高の境地が玉清境ではなく、上清境であることを教わり、いっそう修煉に努めた。その後中原の乱れを知り、東南の地に移り住み修行を続け、八十三歳のときに道術を完全に修得し劍に託して形を化して尸解した。陽洛山に入った夫人は五百日の清齋を修しつつ、一万回読むと仙人になれるという「大洞真經」を読み張道陵ら真人たちの教えを受けた。この修行が完成すると龜山九靈太真の西王母、金闕聖君、南極元君が現れこの神々に伴われて上清宮に参台し玉晨大道君の謁見を受け、紫虚元君の号を授けられ、南岳の衡山を管轄するようになったので南嶽魏夫人と呼ばれるようになった。そして、紫虚元君・上真司命・南嶽魏夫人が、東晋の興寧年間を中心に弟子の靈媒楊羲を通して許謐・許翽親子に誥授した。これが「上清經」のはじめである。彼らはその記録を大切に残し、許翽の子許黄民が経符秘籙として収集した（三君手書）。孔黙がそれを写していたが、その後焼き捨てられたり災害にあったりして失われてしまった。その頃靈宝派の葛巢甫が靈宝經を造構し大いに流行していた。これを見た王靈期はそのやり方を真似し、許黄民から経を写させてもらったものに手を加えて世に出し人気を博した。ここで付け加えられたものと三君手書のもので混同してしまい、同等に評価されるようになった。その後上清經は馬家のもとに渡り、鐘義山のもとにいくつか真蹟も残ることになった。これとは別系統の杜家に伝わる経書を点検し、それをまとめたのが顧歡であり、「真迹」と名づけられた。しかし陶弘景はそれに満足せずさらにいっそうの資料収集に努めたほか、高度の文献学的方法論を適用して積極的に手を加えた記録が「真誥」であり、以後上清派の中心經典となる。陶弘景はこのように上清經の原型を重視したので上清經一尊派と呼ばれた。また陸修静は靈宝派・三皇派の道書も集める諸經融合派であり、道書を洞真・洞玄・洞神の三洞に分類し、さらに太玄・太平・太清・正一の四輔の分類をすることで三洞四輔 12分類を行った。ここでは「真誥」に書かれていることを中心に見ていこう。

まずは巻二十「真胄世譜」に書かれた登場人物の紹介から見ておこう。ここには許氏の系譜いわゆる族譜があり、許長史と呼ばれる許謐を中心としてその七代前の許敬から書き起こされている。これは七世父母の救済というインドの輪廻の考え方から発展した、七代

前の祖先の陰徳が現在に及ぶという祖先崇拜の意識があるためである。許謚の兄で許先生と呼ばれる許邁は、黄庭経（黄庭経には黄庭内景経と黄庭外景経があり、ここでは黄庭外景経）の書写で知られる道教好きであった王右軍（王羲之）と交流があったことが記されている。許謚は科斗との間に三男一女をもうけた。そのなかでも三男であった許掾と呼ばれる許翽は幼い頃から許謚から期待され、清純で高潔、俗世を離れて仙化することを望んでいた。そのため仕事にもつかず修行に専念していた。また霊媒師であった楊羲についても触れられていて、年若くして宗教上の交わりを結び学問好きで能力が高かったことが記されている。先に許謚に教えを伝えた霊媒師華僑はしばしば冥界の教えを世間に口外したため叱責され楊羲と交代させられたらしい。真人については、巻一に司命君、青童大君、王子登、王子喬、周季通、茅季偉、裴玄人、三官保命司茅思和、紫微左宮王夫人、許謚の相手をした滄浪雲林右英夫人、上真司命南嶽夫人、紫清上宮九華安妃といった重要な真人たちが列挙されている。

幽界と顕界は上部の仙界、中部の人界、下部の鬼界の三部からなり、人の中の善人は仙に仙の中の罪を負っているものは人に、人の中の悪人は鬼に、鬼の中の福德ある者は人に戻るという形で仙・人・鬼三部世界を行き来している。真仙になる過程にはさまざまなものがあるが、代表的なものは先祖の陰徳によって直ちに仙官に補任されるもの、南宮に入って煉化を受けるもの、在世中の功德によって受ける果報としては生身のまま地仙になって不死を得る最高ランクの白日昇天によるもの、肉体を何かに託して尸解して仙去する上尸解によるもの、死んでから洞天の宮殿に入って修行の道を授かるもの、朱火宮に赴いて肉体を煉化するもの、地下主者となった上で280年後に真仙の階位を進む尸解によるもの、鬼官の位を経て地下主者になり真仙に変化する下尸解によるもの、自らが仙去することはできないが功德が子孫に及び仙道を学ばせそのことによって済度されるものなどいろいろある。

真仙になるための修行法としては、經典の読誦によるものがある。これは大洞真経や道德経、黄庭内景経を一万回読むと仙人になれるというものである。この他に存思によるものもあり、心臓のなかに形象があり錢ほどの大きさで心臓のなかで赤色をしているのを存思し、光芒が心臓から齒のあたりに上がってきて胃のなかに戻っていくのを存思すると心臓と胃の中が見えてくる。そこで初めて息を吐いて唾を飲むこと三十九回これを一日三回十八年間続けると昼間に歩いても影ができず、百鬼やもろもろの邪悪な災気を追い払うようになるというものである。このように真誥には真人たちの名前、仙人鬼の三部世界、仙人になる方法が具体的かつ詳細にかかれているのである。これが道教上清派の一つの魅力であり数多くの信者を獲得するに至った理由であろう。

## 課題2 書家と道教

課題1に述べたように「黄庭経」の書写を王羲之がするなど道士の中には優れた書家も多く、書と道教の間には密接な関係がありそうである。「真誥」を編纂した陶弘景自身も、真蹟はほとんど残っていないものの、同時代の書評庾肩吾の「書品」に古今の能書家百二十八人を上の上から下の下までの九品に分けたうちの中の下18人のなかに名がみえることから推察するに、優れた書家であったようである。また書くだけでなく鑑賞するのをもとても好きであったようであり、書跡の収集に熱心であった梁王朝の武帝との個人的な関係を生かして、普通は見ることのできない偉大な先人たちの秘蔵書跡を鑑賞し、数多くの真蹟に触れる機会を持ち鑑定眼を身につけた。(梁王朝は道教と対立する熱心な仏教国家であったが、陶弘景は、梁の名付け親になったことから分かるように、非常に頼りにされていた。茅山にあった彼と宮中の間を使者が行き来し、山中宰相と呼ばれる程の地位にあり武帝の相談を受け政策に関与した。)そこで特に心引かれたのが鐘繇と優れた書家であり道士としても有名な王羲之の書跡であった。鐘繇の真蹟は江南ではほとんど手に入れることができなかったが、王羲之の書跡には精通し高いレベルの鑑定眼を持っていた。王羲之の真蹟は当時から非常に価値が高かったから、その鑑定能力は非常に役立った。このように十分な能力を身につけていたが、常に向上心を忘れず、晩年になっても主書令史という中書省の下級吏員になりたいという意欲を見せるなど、彼の書にかける情熱は尋常ならざるものがあつた。

このような陶弘景が「真誥」を編纂したのは、熱心な道教信者で上清経に傾倒していたという強い思いとともに、書に対する関心もあつた。彼は三君の書に深く魅せられていたのである。そのため従来の研究成果である「真迹」や摸本では満足できず、三君の真蹟を求めて各地を巡り歩き自ら収集した。このときの資料の集大成が「真誥」であるといえる。上清経にはたくさんの偽書(三君手書以外の後に付け加えられた書)が混入あるいは故意に付け加えられているから、その真偽を判定し真書のみをまとめるのに、彼の真蹟を見分ける卓越した書の鑑定眼が必要不可欠だったはずである。三君のものはどれもそれ相応のレベルに達していたようであるが、その中でも楊羲のものは特に素晴らしかったらしく、王羲之・王献之の二王に勝るとも劣らない相当なものであると評価している。その楊羲の書跡には二種類のまったく違う書体で書かれたものが存在する。草行体で書かれ所々塗りつぶされたものと、謹正な書体のものである。これを陶弘景は前者は真仙が降臨した際に口授された内容を速記したものを後で加筆訂正したもの、後者は許謚・許翽に伝えるために書き直したものと推測した。道教の真人たちは文字を用いず言葉によって霊媒に口授し書き取らせるという形式をとった。真人たちは、三元五徳八会の気が凝結した飛天の書なる文字から生まれた一丈四方の光芒を放つ八龍雲篆なる文字を用いた天書を使うから、それを模倣した地書を使う地上の人間にはわからないし、地書を使うことは固く禁じられていたので、言葉を使うしかなかったのである。そうであるならば楊羲の草行体のものはもっとも真仙の教えに近いものであり、もっとも価値があるということになるのである。天

書を理解することができないのなら、その楊羲や許氏親子の価値ある書をオリジナルになるべく近い状態で収集し理解したいという情熱が「真誥」を完成させる原動力になっているのだろう。当時は現在ほどオリジナルが大切に考えられていたわけではないから、彼のその研究姿勢は時代を先取ったものなのであり、顧歡の研究成果などと比べて価値があるといえる。つまり書家が一方では道士であったことで、古来より研究が進められていた高いレベルの書芸術の鑑定法が道教の研究にいかされ、その最高水準の研究成果が「真誥」であるといえるわけである。

#### 参考文献

「書と道教の周辺」吉川忠夫著 平凡社